

広島市立大学国際学部特別公開講座
トランプ政権下のアメリカと今後

2021年2月20日
広島市立大学国際学部
倉科 一希



終章「『例外』の国の例外？」でトランプ政権初期の政策・トランプ政権誕生の歴史的背景を検討

本講義の要点

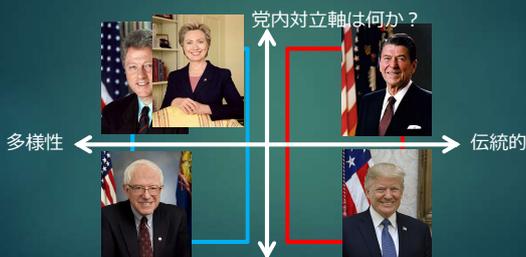
- ▶ 本講義の議論は、以下の3点に要約できる：
- 1) トランプ政権成立の背後には、歴史的に蓄積された矛盾や対立が存在
 - 2) この矛盾や対立は、共和・民主両党に及ぶ
 - 3) 当面はこの対立を前提にアメリカ政治が展開する

構成

- I. トランプ政権の4年間
- II. 歴史的な位置づけ
- III. もう一つの潮流
- IV. バイデン政権の見通し*

*) 講義では省略、質疑の際に③のみ紹介。

I. トランプ政権の4年間



1. 党派対立と党内対立が激化

- ▶ 既存のエリートに挑戦し続けたトランプ
- 2016年の大統領選挙から、共和党内の指導部や民主党を厳しく批判
 - 大統領就任後も緊張をはらんだ政権運営
- トランプ支持者の議事堂乱入は、対立の頂点

2. 党派対立の激化

- ▶ トランプ大統領は民主党への批判を続ける
 - 民主党の支持母体と想定された人々への攻撃
 - = 移民・女性・黒人
 - オバマ政権の成果を覆すような政策
 - オバマケア廃止、キューバやイランとの政策

3. 党派を超えた主流派批判

- ▶ 第二次世界大戦後から継承された外交・対外政策を攻撃 = 既定路線を支持してきた共和党主流派批判
 - 自由貿易・グローバル化推進に批判的
 - ・ 北米自由貿易協定 (NAFTA) 反対、海外投資の抑制
 - 伝統的な同盟関係の見直し
 - イラク戦争への批判

3. 党派を超えた主流派批判 (続)

- ▶ 共和党のみならず民主党でも、党内主流派に対する批判が広がる
 - 2016年大統領選挙の本命と目されたヒラリー・クリントンへの強い反発
 - オバマ政権への期待が裏切られたとの失望
 - ← 大企業に対する政府支援 (占拠運動)

II. 歴史的な位置づけ

- ▶ アメリカ社会に存在する対立・緊張の歴史的な源泉を探る：
 - ① 共和党を中心に新自由主義が台頭 (1970s~80s)
 - ② 民主党が新自由主義を受容 (1990s)
 - ③ 新自由主義への批判 (2000s~)

① 新自由主義の台頭

- ▶ 1930年代から60年代にかけて成立したアメリカの福祉国家に対する反発として登場
 - 経済不振や税負担に対する不満が、1960年代後半から70年代にかけて顕著に
 - 1970年代の経済不振を解決できない福祉国家に対する疑念
 - ↔ 世界恐慌対策の「成功」

① 新自由主義の台頭 (続)

- ▶ 国家による規制を批判し、市場への信頼を唱える新自由主義が台頭
 - 規制緩和を唱道したレーガン政権の下で経済が成長、新自由主義の評価が高まる
 - 共和党の基本的な経済政策として定着

② 民主党による受容

- ▶ 民主党は、新自由主義に対する有効な代替策を提示できない → 新自由主義の受容に傾斜
 - カーター政権の失政（とそれを乗り越えたレーガン）というイメージの払拭が困難
 - 冷戦の終焉が、市場を信頼し、政府の経済介入に批判的な雰囲気醸成

② 民主党による受容（続）

- ▶ クリントン政権の下で実現、とくに社会福祉
 - 大統領就任以前から、民主党の中道化を提唱する民主党指導者会議の旗手
 - アメリカに留まらない世界的な潮流



③ 新自由主義への批判

- ▶ 政治・経済における主流となった新自由主義に対する批判が2000年代から顕著に
 - 世界金融・経済危機（リーマン・ショック）で苦境に陥った白人中産階級・労働者階級が中心
 - 政府による支援を求めるリベラル派と、それを善しとしない保守派に分裂

③ 新自由主義への批判（続）

- ▶ 保守的な白人の不満は屈折した形で表明
 - 企業の海外流出などの影響で生活は困窮しているが、政府が提供する社会福祉を忌避
 - オバマ政権による健康保険改革を批判する茶会（ティーパーティー）運動



III. もう一つの潮流

1. 第二節で提示したのは、一つの解釈
 - ▶ 国際的な比較を重視
 - ▶ 原因としての新自由主義・結果としてのポピュリズム
 - ▶ 西ヨーロッパ諸国で興隆した、類似の政治運動・勢力

⇕

アメリカ史の連続性を見落しているという批判

2. トランプ支持者と差別

- ▶ トランプ支持者の間の人種・ジェンダー差別を重視する議論
 - トランプ政権を、マイノリティの権利獲得とそれに対する反発という文脈に位置づける
 - = 1960年代以降の民主党と共和党の党派対立
 - トランプおよび支持者の差別意識は明らか

2. トランプ支持者と差別（続）

- ▶ 2016年の選挙戦の最中から、トランプと支持者に人種差別の問題が発生
 - ▶ トランプの発言者や支持者の暴力
 - ▶ 南部連合の記念碑をめぐる論争や暴力を伴う衝突



3. 格差なのか、差別なのか

- ▶ トランプへの支持が広がった原因を格差による不満に求めるか、それとも差別意識に求めるか
 - ▶ 社会福祉を拒絶する白人保守層に、人種的な意識を認めることも可能
 - ▶ アメリカの特殊性を強調しすぎる恐れ
 - ▶ 必ずしも相いれない選択ではないが...



IV. バイデン政権の見通し

- ▶ バイデン政権の政策を予想するのは困難なので、これまでの歴史的潮流の行方を検討する
 - ① トランプ支持者はどれくらいいるのか
 - ② 彼らは共和党に影響を及ぼし続けるのか
 - ③ 民主党は分裂を解消できるのか



① トランプ支持の広がり

- ▶ 熱心なトランプ支持者はどれくらいいるのか
 - ▶ 2020年大統領選挙でトランプは7,400万票以上を獲得、この数字は衝撃的
- ⇕
- ▶ トランプだから投票した人はどれくらいいるのか？



① トランプ支持の広がり（続）

- ▶ 2021年ジョージア州上院議員選挙決選投票
 - ▶ 2020年本選挙と比べて、共和党候補への投票数の減少（10.0%）が民主党候補（4.4%）より大きい
- ▶ リズ・ Cheney 下院議員の役職解任動議
 - ▶ 秘密投票で 145 対 61（白票 1、4 名投票せず）で否決 = 28.9%の共和党下院議員がトランプ支持

② トランプ支持者の影響力

- ▶ トランプ支持者は、共和党に影響を及ぼすことができるのか
 - ▶ 数字を見れば、必ずしも多数派とは言えない：最大でも 30%、少なければ一桁
- ⇕
- 熱心な支持者には、数字以上の影響力：予備選挙

② トランプ支持者の影響力（続）

▶ 本選挙に出馬する党の候補者を選ぶ予備選挙

- 一般党員（州によっては党員でない有権者も）が、投票で候補者を決定する制度



- 関心が低い：大統領選挙でも20~30%台



少数の有権者が結果を左右する



③ 民主党の動向

▶ 共和党と同様、民主党でも党内対立が予想される

- 2020年の予備選挙では、主流派を代表したバイデンなどと、左派のサンダースやウォーレンが衝突



- 就任後の人事で、左派の登用が少ないとして反発も
共和党との協力の是非をめぐる対立が予想される

③ 民主党の動向（続）

▶ 党派対立を超えて協力するか、自陣営を固めるか

- 民主党にとって、共和党との協力は不可避



- 民主党が重視する立法などが妨害される懸念
- 分裂している共和党と、本当に協力できるのか
- ・ オバマ政権の失敗（2011年予算管理法など）

まとめ

▶ 最初に提示した論点の確認

- 新自由主義とグローバル化に対する、白人中産階級・労働者階級の不満がトランプ躍進の主な原因
- 同じような不満を持ち、政府の役割を肯定する人々が民主党の左派を支持
- 民主党・共和党の党内対立は深刻化する見通し